Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】十九世紀イタリア国家統一運動におけるカルロ・カッターネオの連邦主義

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2010-01-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 武重,千尋, 山辺,規子, 渡辺,和行, 小路田,泰直
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1288

氏名（本籍）	武重千尋　（香川県）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博課第365号
学位授与年月日	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	十九世紀イタリア国家統一運動におけるカルロ・カッターネオの連邦主義
論文審査委員	（委員長）教授　山辺規子　教授　渡辺和行 教授　小路田泰直

論文内容の要旨

本博士論文は、1861年のイタリア王国建国をもって国家統一を果したイタリアの統一を目指す運動であるリソルジメントの中で、特にミラノを中心に思想面で一定の役割を果たし、現在のイタリアのありかたを考える際に再び評価される対象となっているカルロ・カッターネオの連邦主義思想を考察したものである。

この論文の構成は以下のとおりである。

はじめに

第一章　一八四八年革命以前におけるカッターネオの連邦主義の系譜

第一節　科学と発展―ミラノ社会とカッターネオの研究活動―

第二節　経済学研究―貿易の自由化と所有権―

第三節　実践の場―ロンバルディア―

第二章　ミラノ一八四八年革命とカルロ・カッターネオ

第一節　「ミラノの五日間」

第二節　執筆活動による統一運動

第三章　一八四八年革命直後におけるカッターネオの連邦概念の成立

第一節　差異と共存

第二節　革命と人民

第三節　連邦の権利

第四章　イタリア統一戦争におけるカッターネオの外交的政治参加

第一節　イギリスのメディアと政治情勢

第二節　カッターネオの「イタリア問題」寄稿記事

第三節　カッターネオの記事への反響

第五章　1860年以降におけるカッターネオの動向と連邦制構想

第一節　第一次イタリア独立戦争と地方公共団体法

第二節　カッターネオの連邦制構想

おわりに

本論はカッターネオの連邦主義をその考察の対象とする論文であるが、カッターネオがイタリアの国家統一運動であるリソルジメントの担い手の一人として位置づけられるがゆえに、その思想は必然的にその政治的活動を通して考察されるべきものである。そして、カッターネオの活動は一八四八年革命を画期とするために、本論文も一八四八年革命とイタリアがサルデーニャ王国に併合されるかたちでイタリア王国として統一されていく1860年前後を画期として、その過程を追う構成をとっている。

第一章では、一八四八年革命以前のカッターネオの活動が考察される。1801年、オーストリア支配下のロンバルディア地方の中心ミラノに生まれたカッターネオは、啓蒙思想家のロマニョージのもとで『一般統計年報』の編集に携わり、1839年に『ポリテクニコ』誌を創刊した。この『ポリテクニコ』誌は、最新の科学的知識を普及させ社会を発展させていこうとする雑誌であり、経済研究や地域研究、新技術紹介などの記事が目立つ。また、カッターネオは、当時ミラノにあったアソシエーションやカフェなどでの活動を通して、ミラノを中心とするロンバルディア地方における経済的発展をリードする知識人の主要メンバーに数えられるようになる。カッターネオの連邦主義思想は、この時期にすでに萌芽が見られる。すなわち、古典経済学の影響を受けるカッターネオの経済研究では、個人主義的な自由が主張され、地誌研究では地域ごとの文化的多様性が重視されており、後の連邦主義思想につながるのである。

第二章では、一八四八年革命での実際の活動と、カッターネオ自らが史料を収集しまとめた記録を通じて、一八四八年革命がカッターネオの思想に持った意味を問う。

ヨーロッパ各地で自由主義的改革運動と民族主義運動の高まりを示した一八四八年革命は、イタリア各地でも社会改革と外国支配から独立しイタリア統一をめざす運動として繰り広げられる。そのなかで革命の口火を切ったとされる「ミラノの五日間」と呼ばれる事件は、3月17日から22日の五日間において、オーストリアの駐留軍と蜂起した市民軍が対立し、臨時政府が樹立されたものの、穏健派によるサルデーニャ王の軍隊の援助要請がうまくいかず失敗に終わることになる事件である。この事件において、カッターネオは最初から蜂起に参加したわけではないが、途中から穏健派とは対立しながら蜂起の中核を担う民主派の指導的立場をとることになった。結局「ミラノの五日間」が失敗に終

わると、カッターネオは亡命し、亡命先でカッターネオは『一八四八年ミラノ蜂起』や『三年間文書集』のマニフェストを発表して、革命の三年間を総括する。このような著作からは、カッターネオが、中央集権化に向かうフランスとは異なり、多様な方言を有し商工業の伝統的な中心地である諸都市によって特徴づけられるイタリアにおいては、各地域が邦として「活力ある人民の議会」による自治権を有しつつ、地域主義に陥ることがないようにするために国民議会が機能するという国家像を抱いていたことがうかがえるとする。

第三章では、さらに一八四八年革命に関する史料集である『三年間文書集』そのものと、この革命の直後にリソルジメントの活動家などと交わした書簡などの分析を通じて、カッターネオが、自らの連邦主義を確立させていく過程を追う。カッターネオの連邦主義は、君主中心の統一をめざすサルデーニャ王国による統一への動きと相容れない。それだけでなく、リソルジメントの民主派活動家の中で中心的な人物であったマッツィーニがイタリアを統一国家とすることを優先したことに対して、より強く共和制を主張する。一方、ミラノ民主派の一人であったフェッラーリが主張するイタリアの既存の諸国家を再編成する「諸共和国連合」に対しても、統一を前提としないがゆえに意見を異にするとする。カッターネオが中心にすえたのは、「ミラノの五日間」で戦闘の中核を担った「人民 popolo」であり、その戦闘は自由のための戦いであった。人民は良識を備えており、このような人民が統一に導かれるためには、「併合」というヘゲモニーに基づく論理ではなく、人民の権利にもとづく平等な関係性にもとづく「自由な連邦主義」であるべきだ。このようにカッターネオは説いたとして、カッターネオ同様民主派とされるマッツィーニやフェッラーリの思想との差異を明らかにする。

第四章と第五章は、実際にイタリアが統一されていく時期の問題を取り扱う。このうち第四章は、カッターネオがイギリスの『タイムズ』紙の依頼を受け執筆した「イタリア問題」記事の検討を通じて、カッターネオはイギリス政府をイタリア独立支持に導く努力をしていたことに注目する。当時イギリスではフランスの動向に深い関心が寄せられ、フランスが大きく関わる「イタリア問題」もまた注目されていたが、カッターネオはこの記事の執筆を通じて、「イタリア問題」に対するイギリスの干渉を引きだそうとした。しかし、保守的な『タイムズ』紙は不干渉を是とする立場をとり続け、6回分の掲載が予定されていたにもかかわらず、カッターネオの記事の掲載を中止した。その結果、カッターネオの記事は、より自由主義的な『デイリー・ニュース』に掲載されることになる。第四章は、このような外国でのマス・メディアにおける記事掲載とそれに対する反応を取り扱いながら、カッターネオによる一種の外交的活動の意味を考察している。

第五章は、まさしくイタリアが統一に向けて動き出し統一が実現する時代において、カッターネオが思想としての連邦主義を、より具体的な「連邦制」として構想することを取り扱う。

イタリア統一は、1860年にナポリ、シチリアといった南部諸王国がガリバルディの遠征によって統一王国の枠組に入れられていくことによって始まる。ガリバルディが南部遠征を開始すると、シチリ

ア王国における民主派クリスピによって、南部遠征に対する支援を要請されたカッターネオは、クリスピに対する返書のなかで、具体的な連邦制構想を明らかにする。この返書において、カッターネオは、1848年に成立したスイス連邦をモデルとして、シチリアとナポリに邦議会を設置するよう提案した。さらに、イタリア統一実現後に施行された中央集権的な地方公共団体法の施行に対して、かつてロンバルディアにみられた直接民主制の集会「コンボカート」を推奨した。したがって、カッターネオがアメリカやスイスの連邦制をもとに構想した連邦制は、人民の自治に立脚した地方議会が国家全体を主導する連邦議会とともに一定の権限を有する国家体制であったといえる。

以上のようなカッターネオの活動、彼が構想した連邦主義の考察により、本論文は以下のような点を指摘している。

第一に、カッターネオの連邦主義、連邦制は、実際には実現にいたらなかったが、それゆえにリソルジメントが持っていた多様な性格にある隠れた一側面を明らかにすることができる。そして、この多様性こそが、カッターネオが評価した原理であった。また、その多様性は、彼が直接的に政治参加した一八四八年革命の「ミラノの五日間」でミラノがみせた思想の特徴でもあった。

第二に、カッターネオの連邦主義は19世紀に成立したイタリア王国で採用されなかったが、当時の体制の問題点を浮き彫りにした構想であり、イタリア近現代史上常に現実の統一的中央集権体制に対して、民主化が実現される政治体制として繰り返し再評価の対象とされた。さらに20世紀末にヨーロッパ連邦が成立するにいたって、その連邦構想はＥＵという現実の体制にまさに直結するものであり、現代的意義を持つ。

第三に、カッターネオは、「科学」の成果を実践の場で実現するために知識の普及に努めた。一八四八年革命においては自らこれに参加し、革命後には他国へのマス・メディアへ寄稿したり、活動家にアドバイスを与えたりした。その活動は広く、狭義では直接的政治活動をし続けたといえないが、広義ではつねに市民社会において積極的に活動し続けた人物であり、つねに自由な人民の参加を意識し続けた人物として評価できる。

本論文は、カッターネオというリソルジメント期に活動した知識人の思想と活動を通して、リソルジメント期のイタリアの特徴を再評価するのみならず、リソルジメント期から現代にいたるイタリアの政治体制のありかたを捉え直すという意味も持っているのである。

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、1861年のイタリア王国建国をもって国家統一を果したイタリアの統一を目指す運動リソルジメントの思想家カルロ・カッターネオの活動と思想を考察した論文である。

イタリアのリソルジメント運動の中には、イタリア王国につながるサルデーニャ王国の政策立案者である首相カヴール、青年イタリア党の結党など常に運動の中心的な役割を果たしたマッツィーニ、具体的に統一につながる軍事行動の指揮をとったガリバルディなど多くの担い手がいるが、その中でカッターネオはそれほど目立った存在とはいえない。このような存在であるカッターネオに注目することで、リソルジメントが持つ運動の多様性を明らかにし、さらに現在のＥＵ体制の中においてイタリアのあるべき姿を模索するなかで、再評価されつつある連邦制に光をあてたことは、この博士論文が持つ現代的意味を示しているといえよう。

このカッターネオの活動、思想を明らかにするために、著者はイタリア語で書かれ英語にすらほとんど翻訳されていないカッターネオ著作集を丹念に読み解き、その思想を明らかにしており、歴史研究の基本に忠実である。その訳文はまだ推敲を必要とするとはいえ、日本語ではほとんど読むことができない史料に向かっていった姿勢は評価できる。

また、カッターネオは、さまざまな科学に通じており、一般に科学技術を知らしめ、ロンバルディア地方の殖産興業による近代化をめざした知識人としても、中央集権国家を志向したイタリア王国の政治体制のアンチテーゼとしての連邦体制国家を主張した思想家としても評価される。このために、総合的にカッターネオという人物の研究史を追うことは、多くの知識を自分のものとすることを必要とし、大きな労苦を伴う作業である。著者はこれに果敢に挑み、自分なりの評価をまとめたところは評価される。

一方、この論文をリソルジメント期の研究として考えると、通常はリソルジメント運動の表舞台にたつマッツィーニやガリバルディ、あるいはサルデーニャ王国の動向を中心に追っていくのに対して、重要な地域であるにもかかわらず十分な考察がなされてこなかったミラノを中心とする歴史に着目したこともまた、著者のオリジナリティを示す点であると指摘できる。

本論ではカッターネオを中心として議論を進めたために、ミラノという都市が近世から近代にかけて担っていた経済的、文化的役割を十分に論じるにはいたっていない。しかしながら、一八四八年革命期のミラノを的確に示すことは、現在にいたるまでイタリアの経済上の中心とされるミラノを考察することにつながるものと考えられる。著者がまさしく指摘するように、多様な都市群をもって特徴とするイタリアの歴史にあって、日本においてはフィレンツェやヴェネツィアなどに比して十分な評

価がなされていないミラノを取り上げることは、イタリア史の見直しにもつながるものといえる。

もっとも、リソルジメント運動は、さまざまな運動と国際体制の変化の中で揺れ動く。カッターネオ自身、もともと政治家たろうとした人物ではなく、彼の政治的構想は他の知識人に対する書簡による提言や諸研究の中で言及されるタイプのものであった。そのために、彼がめざした連邦体制、すなわち各地域が議会を持つ共和体制をしき全体として統一したイタリア連邦体制は、必ずしも具体的に示されるわけではない。本論文においても、「統一」と「連邦」、「君主連合」「共和制」「立憲君主制」といった対立軸に、ときにブレがみられる。その結果、本論文の中心テーマである連邦の概念が、必ずしも明快に示されているとはいえない。また、この時代の「下からの働きかけ」をする存在としての「個人」「国民」「人民」といったことばの使い方にも混乱がみられた。このような概念をめぐる問題は、アナアキズムなど当時のヨーロッパ政治思想との関係も含めて、今後の課題として残されている。

以下、章を追って展開される議論に沿って、この論文の意義と、よりいっそう期待されるべき点を示す。

第一章は、一八四八年革命以前のカッターネオを取り上げる。この時期のカッターネオの活動は、何よりもミラノの発展に貢献した知識人としての活動が評価されてきた。しかし、この章では、このような活動を通じて作り上げられた人脈と、とりわけ経済的研究を通じてイタリアの特性を認識していたことが、後世の連邦制構想の底流にあることを重視する。この指摘は重要であるが、一方でカッターネオが雑誌刊行やさまざまな提言を通じてなした経済的な貢献について、もっと具体的な事実を示しておけば、よりいっそう説得的な主張となったと思われる。

第二章は、カッターネオが唯一革命的な運動に自ら身を投じた一八四八年革命の「ミラノの五日間」の経過と、この革命的軍事蜂起が失敗した直後の亡命中のカッターネオが記した文章から、彼の活動を総括する。

この章では、カッターネオが政治的に急進的民主派に位置づけられてきたにもかかわらず、実際には穏健派に近い存在であったことを示していることが注目できる。著者が指摘するカッターネオの人民武装の思想は民主派に近いが、第一章で示された革命前の活動を照らし合わせて考えれば、この位置づけは説得的である。

ただし、この「ミラノの五日間」についての考察は、もっと詳細になされることが望ましかったと思われる。たとえば、この蜂起がなぜ蜂起という形をとり、失敗への道を歩むことになったのか、それにもかかわらずイタリア統一につながるものとして位置づけられるのはなぜかというように、具体的な事件の経過と事件の因果関係はもっと細かく示される必要があった。他のリーダーについての考察も不十分であり、それぞれの思想的位置づけ、あるいはミラノ市、さらに広くイタリアにおける立場が明確に示されることによって、本来革命活動家ではないカッターネオが軍事蜂起のリーダーとさ

れ、亡命を余儀なくされることの意味がさらにはっきりしたと考えられる。たとえ本論文がミラノに焦点があてられているとはいえ、一八四八年革命はイタリア各地でそれぞれの地域の特徴の応じたかたちで繰り広げられたわけで、ミラノを中心に活動したカッターネオが他のリソルジメントの活動家との連携を取っていくことを示すためには、他の地域における革命の進展にも一定の配慮がなされるべきであったであろう。

第三章では、彼が一八四八年革命に関する史料収集と歴史叙述をおこなっている時期の政治情勢を確認しつつ、同じく連邦主義を主張したフェラーリやイタリアにおいて独立活動を続ける他のリソルジメントの担い手との間でやりとりをするなかで、カッターネオなりの「連邦主義」思想を完成させていく過程を追う。本章では、「自由」「ナショナリズム」「統一」「連邦」など、リソルジメントの指導者たちの価値観のありかたの違いを示しつつ、カッターネオの独自性を示すことに力点がある。カッターネオが同じ連邦主義でも、フェラーリなどが主張する「諸国連合」のような連邦ではなく、連邦議会、連邦政府に一定の権限を認めるアメリカ型連邦を志向したことは、自由主義的経済発展を重視し、下からの市民活動に期待を寄せたことを示すものとして注目されるべきことである。惜しむらくは、カッターネオの主張が必ずしも他の活動家に受け入れられたわけではなく、むしろ孤立する傾向にあった理由が示されていないことで、これがなされていれば、なおカッターネオの連邦主義思想の位置が明らかになったものと思われる。

第四章は、イギリスの新聞『タイムズ』『デイリー・ニュース』への寄稿という面から、カッターネオの活動を考察しようとする点で、イタリア人による研究とは異なる視点からカッターネオを捉えていることがまず評価できる。しかしながら、一亡命者である人間の活動を「外交的政治活動」とするにはより積極的な活動の裏付けが欲しい。また、彼自身の英語圏における人脈についてもっと積極的に示すことも有益だったように思われる。外交的働きかけの意味を考える場合には、同時代の複雑な国際政治情勢のなかでのイタリア諸地域の位置を的確に捉えるという作業にもっと力を入れることが、カッターネオの寄稿記事の持つ意味をより浮き上がらせることにつながったように思われる。

第五章は、まさしくイタリアが統一に向けて動き出し、統一が実現する時代におけるカッターネオの活動と連邦主義の主張を考察する。ここで特に注目されているのは、併合地域における中央集権的な地方公共団体法の施行と、それに対するアンチテーゼとしてのコンボカート（地方議会）と1848年に独立を承認されたスイス型連邦である。統一されたイタリア王国の中央集権的体制に対する拒否感は、ロンバルディア地方にかつてあった議会の存在をより好ましいものに思わせたのではないかとも思われるが、このような地方伝統につながる感覚が、カッターネオの連邦主義、連邦制が繰り返し取り上げられるものとしたことを示す章として、本論文をしめくくるのにふさわしい章となっている。

以上のように、本論文には課題として残る部分もかなりあるとはいえ、日本においては十分に考察がなされてこなかったイタリアの統一運動の重要人物カッターネオの理解に対して大いなる貢献をな

す研究として貴重であるということができる。

なお、本論の中核をなす「カッターネオの連邦主義思想」は、イタリア近代史の編集委員が査読をおこなう『日伊文化研究』第43号（2005年）に掲載されているほか、第一章は『寧楽史苑』第50号（2004年（2005年２月刊行）、第三章は『奈良女子大学人間文化研究科年報』第22号（2007年）において公表済みの論文をもとにしている。2005年に公刊された論文はいずれも、定評ある学界展望である『史学雑誌』（史学会）の「二〇〇五年の歴史学界」の近代ヨーロッパ（南欧）において取り上げられている。また、第四章は『寧楽史苑』第53号（2007年）（2008年２月刊行）で公表されたところであり、第五章の内容については、イタリア学会第55回大会（2007年10月開催）において報告をおこない、イタリア近代史を専門とする研究者によって「今後を期待したい研究」との評価を得た。本論文は、このように刊行された論考に寄せられた意見や、イタリア近現代史研究会（東京）、関西イタリア史研究会、近代社会史研究会などにおける報告に対するコメントを参考にしてまとめられたものであり、研究としての価値は学界が認めるところのものであるといえる。

したがって、本審査委員会は、本申請論文が奈良女子大学博士（文学）の学位を授与するのに十分な内容を備えているものと判断する。